

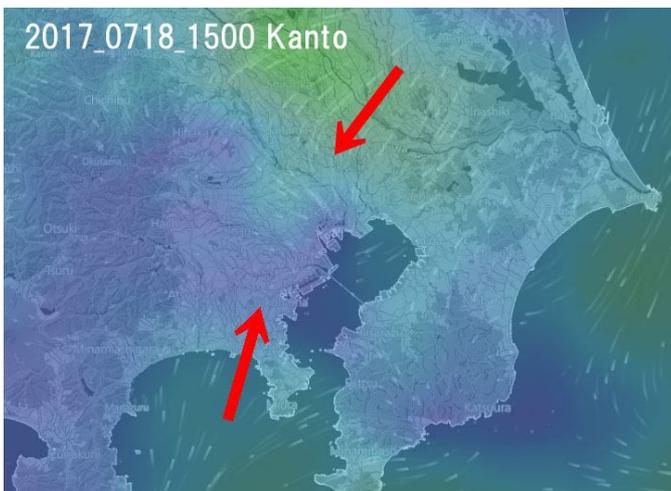
## 「7月18日の雷雨と雹(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

7月18日の15時過ぎ、職場のある文京区は、激しい雷雨に見舞われた。会議中だったが、教室や廊下、それに実験室の窓が開いていないか心配になり、閉めて回った。その時に撮った校庭の写真である。

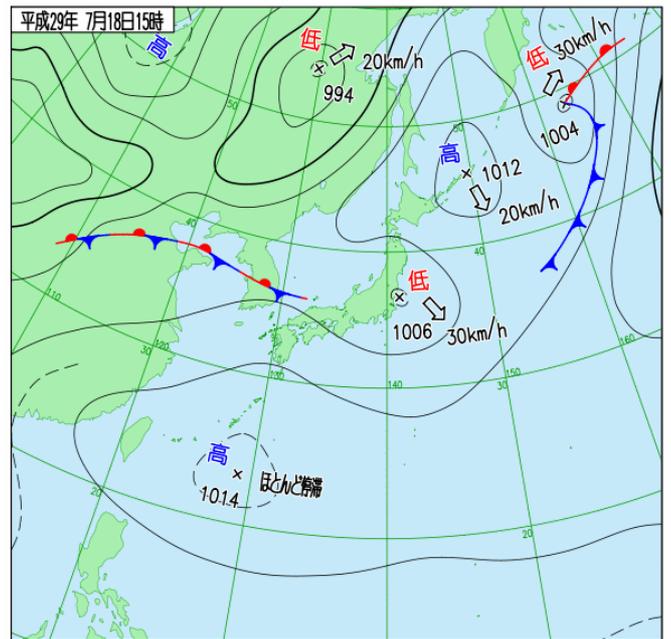


「雨が降っている」というよりも、校庭全体が「滝壺」に入ったような降り方だった。時々、教室のベランダにバラバラと音をたてて落ちるものがある。雹である。上の写真にも雹粒がいくつか写っている。

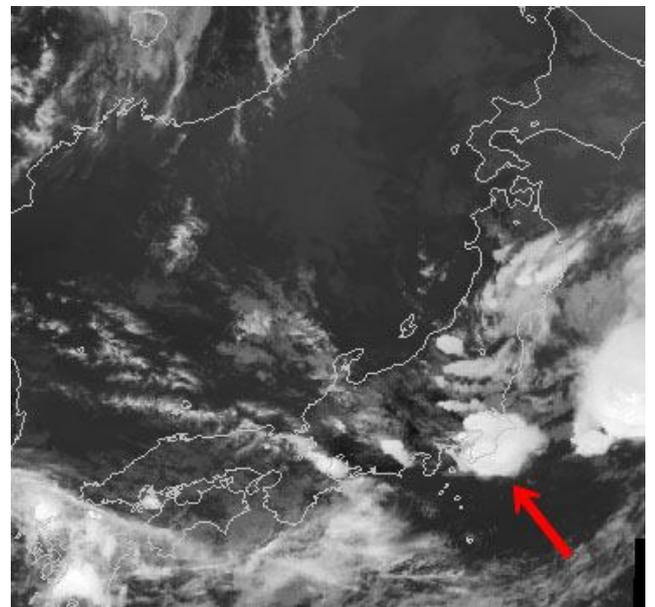


この雷雨を起こしたのは、非常に優勢な積乱雲である。通常、地形性の上昇気流が発生しにくい東京上空で、優勢な積乱雲が発達することは稀だが、今日の大気の状態は特別だった。上図は7月18日15時、関東地方の地上付近の風の状態である。南と北から暖湿流が流れ込んでいる。この二つの気流が東京付近でぶつかり、行き場を失って上昇気流となったのだろう。更

に、上空には寒気があり、優勢な積乱雲を形成したことに、まず疑いはない。強い上昇気流は、低気圧の存在も意味する。



同時刻の天気図を見ると、東日本は高気圧に挟まれた気圧の谷にあり、等圧線が大きくねじ曲がっている。関東東部には弱い低気圧も見られ、大気の状態が非常に不安定だったことがわかる。



雹を降らせた積乱雲(雷雲)は、神奈川県、東京都、埼玉県にかけて、いくつも発生し、「列積乱雲」を形成した。その全体像は、衛星画像にも写っていた。恐ろしく巨大な雲塊で、直径は優に150km以上ある。

雹は、こうした優勢な積乱雲の中で、氷晶が何度も上昇・下降を繰り返して成長するのが普通である。しかし、7月18日の午後に降った雹の形状は、普通の雹とは少し違って、大変興味深かった。